

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	市川市	・学習指導に関すること	さまざまな国籍の生徒が多く在籍している現状の中で日本語の習熟度や学習に対する取り組み方が異なる生徒に対しての教科指導が課題であると考えている。そこで、生徒一人一人の状況に応じた効果的な指導方法について研究し、生徒の学力の向上に資することをねらいとする。	<p>1 生徒の実態 在籍生徒の多くは15歳以上の新渡日外国人である。特にアジア諸国出身の生徒が多い。年齢は10代から40代と幅広いが、近年は10代の生徒が増えてきている。出身国での修学年数の違いや日本語習得状況、学ぶ目的の違いなど多様な生徒が集まっている。</p> <p>2 調査研究の目的 【市川市立大洲中学校】(学習指導に関すること) 生徒一人一人の状況に応じた効果的な指導方法及び学習内容について研究し、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得と学習意欲の向上を図ることを目的とする。</p> <p>(1)本年度の取組について 「生徒が主体的に取り組むとともに学ぶ喜びを感じることでできる自主教材の作製」を中心に次のような取組を行なった。</p> <p>ア 教員研修 ・9月 数学において、「多項式と方程式」をテーマに英語が理解できる生徒向け研究授業を行った。 ・11月 理科の「化学反応式」の授業で、視聴覚機器やパワーポイントを使った授業展開の研究授業を行った。 ・11月 「外国人生徒理解」のため、行政書士と意見交換、質疑応答を行った。 ・12月 渡日して間もない生徒の日本語習得のため、「日本語の教え方」の基本教授法について日本語教師を招き、講義を受け、意見交換を行った。</p> <p>イ 授業実践 本校夜間学級では、日本語学級を設置しておらず、日本語担当教師が配置されていないため、日本語指導を行いつつ授業展開をしていく必要がある。そこで ①自主教材を作成するにあたり、漢字にルビをふり日本語が伝わりやすくする。 ②授業を行う中で指導のポイントとなる言葉を英語に訳すことにより、生徒が日本語のニュアンスを理解できるようにする。</p> <p>4 成果と課題 (1)成果 これまでは見られなかった生徒自身からの発言が多くなってきた。これは、日本語指導を行いつつ授業展開をした結果、学習内容を理解し、自信を持って問いかけに答えることができるようになったからだと考えられる。 さらに、教員にとっても、日本語教材を作成していく中で、生徒の実態を把握し、個に応じた指導方法を考えていく良い機会になった。</p> <p>(2)課題 これまでは、日本語と英語の併用という観点で授業実践を行ってきたが、今後は、様々な母語を持つ生徒たちに対応できるような教材開発を検討していく必要がある。 また、次年度以降入学が予想される日本人の中学校既卒者に対する学習内容及び指導方法を研究していく必要があると考える。</p>
	墨田区	・学習指導に関すること	当校の現状は、様々な年齢、国籍、就学歴の生徒が在籍している。特に近年増加している外国人若年生徒への学習指導や日本語指導が課題である。そこで、生徒一人一人の状況に応じた学習指導や日本語指導のあり方を研究し、今後の指導に役立てる。	購入した書籍は日本語指導の一助として役立てている。また、夜間学級先進校視察を行い、課題である生徒一人一人に応じた学習指導や日本語指導のあり方について研究を深め、指導に役立てている。
	世田谷区教育委員会	・学習指導に関すること	夜間学級に在籍する生徒は、外国出身者が多く、日本語を理解する能力にも差が見られる。また、若年層が増加し8割を占め、特に外国と日本では道徳教育に違いがある。そのため、生徒一人ひとりに応じた学習指導、また基本的生活習慣の定着や道徳教育の充実が課題であると考えられる。 また、日本語学級の設置されている本校にあつては、一年を目安に日本語運用能力を身に付けさせ、通常の学級への転級を図ることが目標であるが、その指導方法についても一層の研究が必要である。 そこで、校内研修においては、学習指導要領に準じた基礎・基本の定着、思考力、判断力、表現力の育成を目標にするとともに、外国籍の生徒理解や日本語の指導技術向上のための研究を進め、先進校視察においては外国籍生徒の指導および日本語指導の研究を進めて、本校における学習指導に役立てる。	多様な生徒が在籍する夜間学級における効果的な個人に応じた指導の在り方を大きな主題とし、文化・慣習の違った生徒理解を深める研修を行った。 1. 生徒の概要 3月1日現在74名の生徒が在籍、うち39名が通常学級、35名が日本語学級に在籍している。国籍は多様であり、日本、中国、台湾、韓国、フィリピン、ネパール、インド、タイ、ベトナム、ミャンマー、ブータン、トルコ、ペルーの13か国に及ぶ。 2. 校内研修 (1)「年度当初にあたり共通認識、共通理解を図る」6月17日評価基準、出席簿の取り扱い、進級判定など(教務部より提案) 教務部より、評価基準の出し方や、出席簿の書き方等、基本のマニュアルが出され、共通理解を図るとともに、進級判定の方法なども確認した。 (2)講演「マナーと国際儀礼(プロトコール)」9月30日 NPO法人日本マナー・プロトコール協会 認定講師の東海林忠博さんを招き、オリンピック協力校(夜間学級)として他国との交流機会が増えることを念頭に置き、生徒理解を深め、効果的な学習が行えるように研修を行った。 ① マナー(プロトコール)と宗教 世界の三大宗教、タブー(食のタブー) ② プロトコールとは ・公式の国際儀礼 ・世界の共通のコミュニケーション・ルール ・異文化理解の基本 ・5つの原則 ③ 国旗 国旗とは、国旗掲揚、卓上旗の扱い方、外国旗との併掲 ④ ユニバーサル・プロトコール ・すべての人に優しく ⑤ 国際親善に際し生徒指導上の留意点 ・宗教(特にイスラム教)の理解と配慮 ・プロトコールは世界共通のコミュニケーション・ルール ・国旗に対する敬意 ・ユニバーサル・プロトコール 異なる文化背景の生徒たちと接する上で、大変有意義な研修となった。 【次頁あり】

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究Ⅰ	世田谷区教育委員会			<p>(3)研究会における研修 12月4日、5日 ①第61回 全国夜間中学校研究大会 京都大会 全国31校の公立夜間学級の教職員および自主夜間中学校等の関係者が移動に会い、研修を深めた。 一日目:7つの教科分科会、5つの領域別分科会で実践報告が行われ、それに対する意見交換、協議が活発に行われた。 二日目:全夜中研六十周年記念として、近畿地区の多くの生徒が参加し、生徒体験発表や各校からの報告が行われた。 「京都・洛友からの発信」では、統廃合の後、夜間学級が昼間部(支援クラス)と共に洛友中が発足した歩みを学んだ。 学びを求めている人がまだまだたくさんいること、そうした生徒たちに指導者側は様々な工夫をして真摯に向き合っていることを学んだ。 ②先進校視察 12月4日 全国夜間中学校研究大会一日目の夜、洛友中学校夜間学級を見学した。在日の年配の方、引き揚げ関係の方などのクラスがあり、自分の習熟度にあった教材を自分のペースで一息懸命学んでいた。最近では新渡日の若い外国籍の生徒も少しずつ増えてきて、関東の夜間学級の状況に近くなってきた。 その後、伝達講習を行った。 (4)校内研修「アンガーマネジメント」 1月25日 日本アンガーマネジメント協会 アンガーマネジメントファシリテーター 小谷 こずゑさんを招き、アンガーマネジメントの研修を行った。 事前にそれぞれが質問項目に答え、自分の怒りがどのようなタイプかを知り、タイプごとに、自分自身の怒りを知り、コントロールしたり、癒したり、ポジティブなものへの変換させたりする方法を学んだ。 職場内、家庭内、多国籍の生徒たちとのよりよい人間関係をはぐくむヒントがたくさんあり、日々の生活に生かすことができる研修となった。 (5)東京都夜間中学校研究大会 2月25日 東京都の8校の夜間学級教員で構成される研究会で、4つのテーマに基づく分科会のもとで研修が行われた。 ① 日本語指導「夜間学級における日本語指導の実践～各校の取り組みから」 ② 生徒理解 通訳のアディカリ インドラ クマリさんを招いて、ネパールについての講演を聞き、近年増加しているネパール人生徒の理解を深めた。 ③ 学校行事「学校行事に関する実践交流～行事の実践状況とこれから」 ④ 入学相談 入学相談時において、学校のルールの伝え方や各学校の工夫している点、苦慮している点などについての情報交換を行った。 (6)その他の研修 「卒業生に学ぶ」 11月13日 本校夜間学級を卒業した高校生を4人招いて、高校での学習、生活、部活動、高校に入るために中学校時代に何をすべきか等、体験談を聞いた。卒業生の実体験に基づいた話により、進学希望の生徒たちは、受験の厳しさを実感し、教職員にとっても卒業生がどのような高校生活を送っているのかを知るよい機会となった。彼らの抱えている悩み等から、中学校時代にどのような指導をしたらよいのか考えさせられた。</p>
	荒川区教育委員会	<p>・学習指導に関すること ・生活指導に関すること</p>	<p>近年、若年層の外国籍生徒、特にネパール国籍の生徒の割合が増加している。今年度は、ネパール国籍の生徒は4割以上を占めているが、ネパールには義務教育の制度がなく、日本の中学校で必要とされる習慣や規範意識が欠如している場合が多い。そのため、夜間学級全体として、学習指導や生活指導が浸透しにくい現状がある。 その一方で、不登校や日本で長く生活する高齢の生徒もあり、多様な生徒に対して、より効果的な学習指導を行い、同時に、日本の社会で生きる力(文化・習慣・マナー)に適應できる生活指導法を確立することが本校夜間学級の課題である。 そこで、生徒たちの実態を把握し、一人一人の状況に応じた効果的な指導や教材の在り方について研究し、生徒の学力向上(日本語力の向上を含む)と日本の社会で生きる力や規範意識の向上を図ることをねらいとする。</p>	<p>適切な学習指導と生活指導をする上で重要な生徒理解を深めるために、上智大学総合グローバル学部 田中雅子准教授をお招きし、ネパールの教育事情や在日しているネパール人コミュニティなどについての講義をいただき理解を深めることができた。 また、生徒に関する情報を教員間で正確に共有するため、ネパール語などの外国語の関係書類を整備したことで、生徒・保護者とコミュニケーションを推進させ、学習指導と生活指導を効果的に行える体制を整えていくことができた。 今後も、日本以外の宗教や文化などを尊重しながら、日本の社会で生活するのに必要とされる教育を推進していく。</p>
	足立区教育委員会	<p>・学習指導に関すること</p>	<p>本校夜間学級には、日本国籍生徒の他に多国籍(10か国)の生徒が在学している。また、昨年度は全日制高等学校への進学者も6名出るなど、卒業生の進路希望も多様化してきている。生徒数も引き続き微増傾向にあるとともに、入学以前に不登校だった生徒が新入生で3名入学し、入学式以降、1日も休まず登校することができている。更に、国籍・母語の多様化、年齢層も幅広いものとなってきている。 このような現状の中で、まず日本語の読み書きの能力を向上させることは、基礎・基本の学力を定着させるとともに、生きる力を育み、確かな学力を向上させるために不可欠である。また、さらなる個に応じた指導法や教材の開発が強く求められている。 これらの課題の解決を図るために、一人一人の学力向上と日本語能力を高めるための効果的な指導法と教材の開発、工夫について研究を一層推進する必要がある。 今後、さらなる国際化が進むと考えられる日本社会において、本校が上記の課題に果敢に取り組み、推進していくことが一層重要であると考えている。</p>	<p>生徒理解を深め、実態を把握し、情報を共有した上で、指導法について研究を重ねたので、総合的な共通理解の中で、研究を推進することができた。 校内の授業公開や相互の授業参観により、各教科や日本語の指導法についての研究が深まり、教員の資質が向上し、教員相互の指導力向上を図ることができた。 とりわけ、12月には、ノンフィクションライターの城戸久枝さんの講演を実施し、中国帰国孤児の戦後70年の実態と状況について認識を新たにするとともに、研究と修養を深めることができた。 本年度も日本語指導にかかわる指導教材の改訂を継続して行い、実態にあった教材の開発と、独自の指導教材を活用した授業実践・研究を継続することができた。</p>
葛飾区教育委員会	<p>・学習指導に関すること</p>	<p>中国、韓国の生徒が減少し、非漢字圏のネパール、フィリピン、インドといった生徒の入学が増加しつつあり、国籍が多様化している。また、年齢層も16歳から82歳と幅広い。各生徒の日本語の習得状況と各教科の習得状況を考慮に入れてクラス編制を行っているが、クラス内においてさえ生徒の学力の差は大きい。とくに、日本語の習得状況には著しい差があり、日本語の意味を理解させることに膨大な時間を要し、授業に支障を来すことも多い。 また、日本の伝統・文化教育を通して日本に関する理解を深めさせることは、日本語指導を一層充実させることにつながる。 以上のことを踏まえ、日本語の授業や教科の授業における個別指導の充実に向けて調査研究を行う。</p>	<p>1 日本語指導・教科指導の工夫・改善 ○第1回授業見学週間では、各教員が互いの授業を見せ合うことにより他者の授業の優れている指導法を学んだり、自己の授業を振り返ったりする契機とした。 ○自己の授業の振り返り等を通して各教科の年間指導計画に修正を施し、生徒の実態に即した授業の展開を考察した。 ○12月4日、5日に行われた全国夜間中学校研究会主催による研究大会に担当教員が出席し、講演会の内容や資料をもとに報告会を行い、日本語指導・教科指導の工夫・改善に向けて意識を高めた。 ○第2回授業見学週間では、第1回の見学内容をもとに各教員が授業改善に取り組んだ成果を実践した。 ○1月には、実践報告レポート「個に応じたきめ細かい指導の工夫」を各教員が作成し、2月の第2回校内研修会でそれをもとに報告会を行い、それぞれの取組について意見交換を行い、授業改善に活かす機会とした。 2 進路指導 ○第1回校内研修会で講師として中山真理子氏を招聘し、「在京外国人入試の制度と実態」についての講話を受け、入試制度等の概略について理解を進めた。 3 日本の伝統・文化教育の推進 ○第1回日本の伝統・文化理解教育で講師として細谷美津子氏を招聘し、「書写教室」を開催し、生徒の知識・理解・技能を促進した。</p>	

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委 託 研 究 I	江戸川区教育委員会	・学習指導に関すること ・生徒指導に関すること	・生徒の年齢、国籍、学習歴、日本語の習熟度が多様化している現状において、教科や日本語を指導する上で、個に応じた指導を行うことは重要な課題であると考えている。そこで、生徒理解を深める方法や個に応じた指導の方法、日本語のより効果的な指導方法について研究し、生徒の学力向上に資することをねらいとする。	・入級に関する実務や難民についての研究を進め、夜間学級の生徒理解を深めることができた。 ・研究により作成した教材を用いて、日本語から国語への移行期生徒に効率的かつ効果的な指導を行い、入試等で成果を得た。 ・日本語のより効果的な指導方法の一つとして、活発な教室活動を取り入れた授業について研究し、指導力の向上が見られた。
	八王子市教育委員会	・学習指導に関すること	在籍生徒の9割以上を外国籍生徒が占める現状において、多国籍、多言語を母国語とする生徒が本校に通学している現状がある。日本語学級の設置がない本校では、早い段階で日本語の習熟を図り、本来の教科学習に移行させる必要がある。また、教科学習において、より理解しやすい教材で学習内容を習得させることが課題となる。そこで、一人一人の生徒の状況を把握したうえで、系統立てた日本語指導、そして基礎的・基本的な学力の向上を図る指導を展開できるようにすることをめざし調査研究する。	効率的に日本語の学習を行い、教科学習へと移行していく教育システムの構築をめざし、昨年度までの実績に加え、購入図書資料を活用し系統立てた学習指導法をつくりあげるとともに、先進校視察を通じて、各夜間学級の成果を調査し、本校の教育活動に活かすことができた。 【2月】 ・外国籍生徒の生活実態に基づいた学習の理解度を的確に把握した。 ・生徒の現状分析及び生徒理解により、適切な学習指導法を考案、実践することができた。 ・日本語指導に関する研修会を行い先進校の事例を基に、教材開発をすることができた。 【3月】 ・教材を有効活用するための組織を作り、学習に必要な日本語を効率よく習得させることができた。
	川崎市教育委員会	学習指導に関すること	川崎市立西中原中学校夜間学級には、フィリピン、中国、バングラデシュ、ネパール等の国籍を持つ生徒が在籍している。また、70代以上の高齢者も2名在籍している。そのため、英語、算数・数学や国語等の基礎的・基本的な学習能力の相違が大きく、生徒に個々に応じた指導が必要であり、そのための教材のあり方について研究し生徒の学力の向上を図りたい。また、餅つき体験など、日本の伝統的な文化に触れる機会を設け、日本文化に対する理解を深めることをねらいとする。その他、体育的講座(27年度は少林寺拳法)を実施して色々な経験をすることが、保健体育等の体力や健康保持等、生活習慣の改善につながるものとする。	英語の学習については、日常会話に困らない生徒もいる一方、アルファベットから始める高齢者もいる。アルファベットに関しては、小学生用のドリルを使って指導にあたるなど工夫し、上級者に対しては、日本の英語学習に対応できるような教材を使うことが必要である。英語の授業では生徒に楽しさを感じさせることが重要であり、英語の学習に対する意欲も増してきている。 国語については日本語初級の生徒が多く、ひらがなや日常会話からスタートしなければならないため、国語の教科書では授業ができない。日本語教材テキストを用いて日本語を勉強したり、小学校の漢字を勉強したりしている。学習意欲も向上している。 日本文化に対する理解を深めることをねらい、餅つき大会(1月13日)を実施した。外国籍の生徒には、日本古来の文化に触れる機会となり日本理解につながった。高齢者にとっては、餅つきについてこれまでの経験を外国籍の生徒に伝えることで、異文化交流・異年齢交流ができ、日々の学習意欲の向上にもつながった。 体育的講座(少林寺拳法 11月26日)においては、日頃から体を動かす機会が少ない生徒が多く、ほとんどの生徒が専門家の指導により運動を楽しみながら体験し、健康保持につながることができた。多くの生徒が好意的な内容の感想を残している。
	横浜市教育委員会	・学習指導に関すること ・生活指導に関すること ・学級経営に関すること	年齢層、国籍、就学年数が様々に異なる生徒たちが集まっており、そのほとんどが日本語を母語としていないという現状がある。そのため、各教科の学習目標に加えて日本語の習得が課題となっている。また就学年数によって、特に数学と英語において、習熟度に差違が見られる。個々の日本語力も多様であるため、生徒一人ひとりに適した日本語教材および数学・英語教材や指導方法を検討し、夜間学級における効果的な学習指導を研究する。また、生活習慣の違いから、トラブルが起きることもあり、それらをしっかりと解決していくことが課題である。授業を通じて、生徒同士または生徒と教員の相互理解を深め、よりよい人間関係の構築に資することをねらいとする。	横浜市内の夜間学級が蒔田中学校に統合され2年目を迎えた。 夜間学級専任教諭が4名、非常勤講師も各教科に1名ずつ配置されており、一斉指導、少人数指導、習熟度別指導など多様な指導方法を効果的に行うことができた。その結果、日本語の習得に励む生徒や苦手教科を克服しようとする生徒、得意教科の力を伸ばす生徒が増えるなど、大きな学習成果が得られた。 また、専任教諭とは別に、中国語と英語の学習支援サポーターが配置されている。生徒のほとんどが外国籍または外国につながる生徒であり、来日間もない生徒にとって、学習支援サポーターの支援により、各教科における学習への理解は深まり、教職員とコミュニケーションがとれる安心感も生まれ、その教育的効果は大きい。一人ひとりの生徒が安定した学校生活を送ることができる大きな要因となっている。 さらに、学校行事や実技教科をはじめとする学習活動では多様な活動が可能となり、生徒の意欲も向上した。その反面で、日本語の習得が不十分な生徒もあり、学習進度や理解の遅れが懸念されている。このような状況をどのように克服していくことが今後の課題である。
	京都市	・学習指導に関すること ・生徒指導に関すること	・学習指導に関して 平成21年度以降、日本語の会話と読み書きが不十分な状態にある帰国・引揚の日本籍・中国籍の生徒や、韓国・朝鮮籍やフィリピンにルーツを持つ等の新渡日の生徒が、年々増加してきたことにより、年齢層や国籍、また学習の習得状況が多様化している。このような現状において、本事業の成果物である「日本語(国語)テキスト」の再編を進め、課内・課外の日本語教室において活用し、社会生活を送る上で必要な日常会話能力を高めることをねらいとする。 ・生徒指導に関して 日本語の定着が不十分でコミュニケーションが取りにくい生徒が多数いる中で、生徒指導の基本であるコミュニケーションに基づく生徒理解が不十分な現状である。そこで、日本語指導の非常勤講師や学生ボランティア・通訳ボランティアを活用し、意思疎通を図る取り組みを進め、教職員・ボランティアと生徒相互の良好な人間関係を構築していくことをねらいとする。	(1)本年度の取組について 上記のねらいを達成するため、以下のとおりに取り組んだ。 ①生活実態を把握するため健康面を含めた定期以外に家庭訪問を増やし、日本語理解等に関する環境の把握に取り組んだ。 ②校内研修会において、その実態を報告するとともに、それぞれの日本語理解環境について情報交換を行った。 ③日本語理解を深めるため、「音読」と「漢字」の学習を重視する取組を進めた。 ④分かりやすく読みやすい日本語教材の作成と市販教材を活用し、興味や関心をひく筆記・音読・黙読・考えるテキストの作成を進めた。 ⑤学生ボランティアや地域ボランティアを活用した。 ⑥全国夜間中学校研究京都大会で生徒交流会を実施した。 (2)改善充実の成果について 上記の取組の成果を定着させるため、課内・課外の日本語教室における学習内容の工夫による授業改善を積極的に進めた。 今年度は「音読」と「漢字」を重点的に取り組んだ結果、殆ど日本語が話せず漢字が書けなかった生徒が、片言ながら挨拶や日常会話ができるようになり、住所や地名なども漢字で表せるようになるという成果があった。また、「文化祭日本語劇」や「民族の文化にふれる集い」での歌唱発表等の経験を重ね、自己有用感を高めた結果、自信ある表情で発表できるようになり、学習全般にわたり積極的に取り組む姿が多く観られるようになった。さらに、屋間部生徒との交流学習の時間に「貼り絵」や「人権標語入りカレンダー制作」等の共同作業を通じて戦争等の過去の経験談を語りコミュニケーションを図る姿も見られるようになった。 ・ボランティアとの会話が行われていく中で日本語理解が進み、生徒との良好な人間関係が構築でき、ボランティアで活動している地域女性会の協力をえて全校生徒が「茶道」や「和服着付け」を学び、日本文化への興味や関心が高まり陶芸や和服について様々な質問をよせるようになり、難しい漢字の意味を知り覚えるため、日本語で質問しようと努力する姿もみられるようになった。 ・生徒理解に必要な言葉の問題については、非常勤の日本語指導教員との日程調整が難しい中で、中国語・韓国語の会話について2回の研修を持ったが、継続し回数を増やすことが必要である。 ・全国夜間中学校研究京都大会で他都市の夜間中学校生徒との交流を実施し、学習等の悩みを話し合い勇気づけられ、学習意欲が向上した。

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	堺市教育委員会	・学習指導に関すること	<p>本夜間学級には199名の生徒が在籍し、その年齢層は16歳から86歳まで幅広く、在籍年数も様々である。199名中外国籍の生徒は143名であり、全体の約7割を占めている(中国籍の生徒が過半数を占める)。国籍は12ヶ国にのぼり、「あいうえお」の学習から始める必要がある生徒も多数在籍している。</p> <p>このような現状により、日本語によるコミュニケーションがうまく取れず、学校生活になかなか馴染むことができず、不安を感じ、集中して学習に取り組めない状況に陥る生徒がいる。このことから、本夜間学級では日本語の習熟度が低い生徒の、日本語能力の向上は大きな課題である。日本語におけるつまづきを無くすことが、年齢や学習歴、国籍の異なる多様な生徒同士の間関係づくりにつながっていくと考える。</p> <p>生徒一人ひとりに応じた効果的な教材づくりや指導方法について研究し、生徒の日本語能力の向上に資することをねらいとする。</p>	<p><生徒の日本語能力向上のための取組></p> <p>① 教材づくり 〔通年〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の日本語能力の向上にむけ、学年の枠を超えて7つの習熟度別クラスに分け、少人数指導による個に応じたきめ細かな指導を実施した。 ・使用する日本語習熟度別テキストは、生徒の実生活に必要な日本語を取り上げた教材となるようにした。これまで作成してきた教材の効果について、毎月検討する機会を設けて意見交換を行い、改訂をすすめた。また、今年度購入した図書も教材作成の際に活用し、わかりやすい教材づくり、授業づくりに努めた。 ・教材検討の際には、生徒一人ひとりの日本語の習得状況について、全教員で情報交換・実態把握を行うことで、よりよい教材づくりにつなげることができた。 ・少人数の習熟度別授業を、生徒の日本語能力に応じたテキストを用いて実施することにより、生徒は学習意欲を向上・維持させることができた。 <p>〔10月〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近畿夜間中学校協議会の研究部会において、日本語指導の教材作成を行っており、10月は本夜間学級から教材を提供した。 ・他府県市の教員と教材開発や指導方法について情報交換を行い、日本語指導の具体的な取組に関する情報を得ることができ、本学級での自主教材作成に生かすことができた。 <p>〔～3月〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度末に「生徒作文集 あしあと」を作成し、日本語学習のまとめとした。毎年作成している作文集なので、昨年度のものと比較して読むことで、自分自身の成長を感じる機会となっている。また、教員による作文分析により、年度末段階での生徒の日本語能力を把握し、次年度の学習指導につなげるようにしている。 <p>② 学びの発表の場 〔11月〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化活動発表会を本校講堂にて実施し、国語や社会等、各教科で学んできた内容を日本語で発表した。生徒は、発表会に向けて学習に意欲的に取り組み、当日は大勢の前で発表することで自信をもつことができた。発表後は、より積極的に学習に向かう姿が見られた。 <p><生徒と教師、生徒同士の間関係づくりのための取組></p> <p>〔通年〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人ひとりの状況に配慮しながら、学校生活や家庭生活の支援を意識した対応を心がけ、電話連絡や家庭訪問をこまめに行った。また、外国籍の生徒が多い状況から、教員自身が中国語、ハングル語、ポルトガル語等の習得に取り組み、生徒とのコミュニケーションを図り、生徒同士をつなぐような声掛けを行うよう努めた。 <p>〔6月、2月〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育相談を実施し、学校生活面や学習面だけでなく、人間関係や日常生活等について、不安感や困り感がないかを聞き出し、生徒に寄り添うようにした。その際、日本語能力が低い生徒に対しては、通訳をつけて実施した。 <p>〔1～2月〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近畿夜間中学校連合作品展に向けて、個人作品及び共同作品を制作し、出展した。共同作品のテーマを「平和」とし、戦後70年にあたり、『二度と戦争が起こらないように、起きないように』という願いを込めた大きなパネルを、各クラス1枚ずつを制作した。生徒同士で協力して制作することにより、生徒の協調性を養った。 <p>〔2月〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者を尊重する態度の育成をめざし、ゴスペル歌手を招いてミニコンサートを開催した。日本語の習得状況に差のある生徒同士でも、音楽によってつながり、涙を流す生徒もいた。歌だけでなく、ゴスペル誕生の歴史的背景や、戦争・平和の話等も交えたコンサートであり、年齢や国籍等の異なる生徒同士が在籍する本夜間学級に合った多文化理解や平和教育となった。また、ミニコンサート後はそれまで以上に音楽の授業への意欲が増し、生徒同士が声をかけたり、教え合ったりする姿が見られた。 <p><成果研究の課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語習熟度別テキスト等を活用しながら、生徒の日本語能力の向上をめざして取り組みを続け、少しずつではあるが生徒に力がつきつつある。その一方で、日本語がある程度理解できるようになると、遅刻・欠席が増える生徒がでてくることが課題である。日本語の学習だけでなく、他の教科指導においても授業改善を図り、生徒のモチベーションが上がる授業づくり・学級づくりに取り組む必要がある。 ・年齢、国籍、言葉等の壁があり、人間関係づくりには今後も課題があると考えている。日々の授業や行事等で、意図的に生徒同士が関わる場面を設定するなどし、より良好な関係構築のために取組をすすめていく。
	岸和田市教育委員会	・学習指導に関すること ・学校・学級経営に関すること	<p>これまでも入学するまでの状況の違いによって、生徒間の学力差は非常に大きかったが、近年日本語会話が十分でない外国籍生徒が増えている現状がある。このことから、個々の生徒の状況に応じた学習指導のあり方が課題となっている。多国籍の生徒が混在して学校生活を送っており、その中で公立高等学校等への進学を希望する生徒も増えている。それに対応した進路指導も向上させる必要がある。そこで、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語(日本語)の能力を向上させる教材、指導法を探る。また、外国籍生徒への進路指導の充実を目指す。 ・異文化理解、多文化共生を推進する学校行事を行う。 <p>の2点について研究し、今後の学校運営に生かす。</p>	<p>(1) 今年度も生徒は多国籍化し(11カ国)若年層と高齢層と更に渡日してから日数の浅い英語圏ではない生徒の入学で個人個人に応じた指導の必要性が非常に高まった。それに対応するために以下のことを実践した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習の基礎となる日本語の習熟度に応じて、1コースを3分割にするなどきめ細やかな指導を行った。出来るだけ複数の教師を配置するなどの工夫を行った。また個に応じた教材を準備するなど丁寧な指導を行った。 ・小学校・中学校の国語の学習指導要領を基本としながら、日常に関連づけた日本語や生活ですぐに役立つことを目指した教材を利用するなど工夫した。 ・定期的に研究委員会を開き、コース間で系統的な国語指導を行うように努めた。 <p>このような取り組みを行った結果、4月当初よりも漢字の読み書きができるようになった生徒が増えた。ただ英語圏からではない新入生は今後も丁寧かつ継続的な基礎的な日本語指導が必要である。</p> <p>全ての生徒が1年間の学習の総まとめとして、自分の考えを作文にまとめ、その集大成として作文集『希望』を発行することができた。さらに、これを使って各コースの授業において、一年間の学習を振り返り、次年度に向けて課題を確認し目標設定を行った。</p> <p>また、外国人に日本語指導を行うNPO法人から講師を招き新渡日の若年層の進路指導について研修を行った。公立高校の帰国生選抜などを積極的に利用していくことで進路が開けていくことを研修した。</p> <p>(2) 人権全体学習を『障がい理解』をテーマにNPO団体を招いて行った。紙芝居やパネルなどを利用した学習で、国籍が違ってもしっかりと理解ができるような学習が行うことができた。</p> <p>また、職員研修で中学校夜間学級を卒業した生徒から教師からの一方的な学習指導だけではなく、生徒同士の学び合いから学習を深めることの大切さを研修した。アクティブ・ラーニングの大切さを知る研修ができた。</p> <p>(3) 異文化理解、多文化共生を推進する学校行事については</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多国籍化が進む生徒の実態を強みとして、国際理解教育、多文化共生の取り組みを人権全体学習として取り組んだ。ジェスチャーやユニバーサルデザインを取り入れた身の回りのものを利用し学習を行った。その結果、国籍や年齢が様々な生徒が共に学び合う雰囲気が醸し出され楽しく学習ができた。

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	大阪市教育委員会	<p>・学習指導に関すること</p>	<p>【大阪市立天満中学校】(学習指導に関すること) 各教科の年間指導計画にもとづき、生徒一人一人の状況に応じた教材の作成と効果的な指導のあり方について研究し、生徒の国語力の向上と基礎的・基本的な学力の向上に資する。 (課題) ・高齢の生徒に対する効果的な学習指導 ・日本語の習得度の低い生徒に対する学習指導 ・高校受験を目指す生徒への学習指導 (その課題を持つこととなった背景等) ・年齢層、国籍など様々な背景を持つ生徒が在籍しており、在籍年数にも差のある生徒が同じ教室で学習している。高校受験など明確な目標を持って通学する生徒には、個別の指導が必要である。 【大阪市立東生野中学校】(学習指導に関すること) 生徒の学力実態を正確に把握し、その学力に応じた教育内容と教材を用意するとともに、効果的な指導方法についての研究と自ら学ぶ意欲を育てる教育活動の研究をする。 (課題) ・国語能力の向上と興味・関心に応じた教材づくり ・日本語の習得度が低い生徒に適した教科指導 ・体育・美術・家庭科の授業での高齢者への教材の工夫 (その課題を持つこととなった背景等) ・70歳以上の生徒が全体の59%を占め、また韓国・朝鮮にルーツのある生徒は88%を超え、生徒の日本語取得状況や学習の習熟度に差がある。そのため、個に応じた効果的な指導方法を研究する必要がある。 【次頁あり】</p>	<p>【大阪市立天満中学校】 (1)本年度の取組について 前述のねらいを達成するため、通年に渡る文集の作成を通じて、生徒が自身の心情を表現する教育活動を進めながら、文字や文章を書き記す学習に繋がった。 ①教員研修 ・通年 近畿夜間中学校連絡協議会主催の各教科部会及び委員会への参加 ・12月 全国夜間中学校研究大会への参加 ②情報交換 ・通年 近畿夜間中学校連絡協議会主催の行事に参加 ・11月 大阪市北区人権教育実践報告会で本校の活動を報告 ③授業実践 ・教科部会等で得た資料、情報を活用して教材を作成し授業実践した。教科の内容を日常生活での出来事に結び付けて理解の助けになるように工夫した。 (2)改善充実の成果について ・夜間学級の指導内容に不慣れな新転任の教員にとっては、他の夜間学級との交流の場で情報を得ることが、とても有意義であった。 ・広い生徒層に対応した授業を進めるために効果的であった。 【大阪市立東生野中学校】 (1)本年度の取組について 前述のねらいを達成するため、本年度は、学習評価と情報収集を柱に次のような取組を行い、実践に結び付けた。 ①研究授業 ・1月～ 全教員が各教科の指導案を作成し研究授業をおこなった。教員が相互に授業参観をおこない、生徒の実態に合った教材の準備とその指導方法が適切か等、意見交換をした。今後の教科指導や学習内容の改善、充実を図った。 ②情報収集 ・12月 全国夜間中学校研究大会京都大会への参加 教員12名・生徒44名が参加して、交流と意見交換をおこない、自己表現力等の育成方法・教材開発についての情報を得ることができた。 ③授業実践 学習の評価や収集した情報を活用して、学習内容の充実と学習教材の開発をおこなった。そして、より豊かなコミュニケーションに必要な日本語の学習を重点的に行うため、文集指導を通じて日本語能力の育成と学習意欲を育てる教育活動をおこなうことができた。 (2)改善充実の成果について ・文集指導を行うことによって、生徒の内面に深く関わることができ、生徒理解にもつながった。 ・研究大会の参加によって、生徒の自己表現力の育成や教材の開発について、教員間で研究・考察していくことができた。 ・きめ細かい指導を継続することによって、生徒の学習意欲の向上に効果があった。 【次頁あり】</p>

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	大阪市教育委員会		<p>【大阪市立天王寺中学校】(学習指導に関すること) 国籍や年齢層の多様化、さらに異なった生活習慣などが近年の生徒の主な特長となっている。また、一様に義務教育未修了であり、生活に必要な学力・日本語習得が不十分であるため、生徒のほとんどは、日常生活・就労に困難を感じている。本校では、そのような生徒実態に鑑み、まず日本語表現力を高めるための学習を行うことを行い、より豊かな言語感覚の習得を目指す。そのため、基本的な日本語理解を高める指導のあり方について調査研究し、生徒の学力向上に資する。</p> <p>(課題) ・教科学習に必要な日本語学習指導 ・日本社会における基礎的な学力指導と日本社会で生活に必要な情報の伝達 ・日本語でのコミュニケーション能力をつける指導 (その課題を持つこととなった背景等) ・義務教育未修了により、生活に必要な学力、日本語習得が不十分である。 ・就学経験がないため、学習の方法や学校文化が身につけておらず、ひいては社会性の欠如につながっている者もいる。 ・多様な国籍の生徒同士での人間関係の構築が難しく、また、多くの新渡日者は、日本社会で尊重されている細やかな感性に慣れていない。</p> <p>【大阪市立文の里中学校】(学習指導に関すること) 習熟度や修学目的の異なる生徒個々の状況に応じた、教材作成及び、より効果的な指導法を調査・研究し、生徒の学力向上に資する。</p> <p>(課題) ・高齢者に対する効果的な学習指導 ・日本語の習得度が低い生徒に適した教科指導 (その課題を持つこととなった背景等) ・様々な年齢層、国籍、修学年数の異なる生徒が在籍することから、生徒の日本語の習得状況や学習の習熟度に差がある。そのために、効果的な指導方法を探る必要がある。</p>	<p>【大阪市立天王寺中学校】 (1) 本年度の取組について 前述のねらいを達成するため、本年度は、文集「わだち」の製作と詩教材をもとにした群読指導を柱に次のような取組を行い、実践に結び付けた。</p> <p>①文集「わだち」の取り組み ・4月 文集「わだち」実施の年間計画を協議し、共通理解した。各中学校夜間学級の文集を収集し参考にした。 ・11月 国語科・学級活動等で「わだち」作成の取組を行った。 ・2月 「わだち」をもとに「語り合う会」その他で発表・意見交流を行った。義務教育年齢のころに、戦争や貧困、病気、差別、家庭事情等の理由により学ぶ権利を奪われてきた過去を持つ生徒たちにとって、その当時を中心とした自分史を発表したり、それを共感とともに受け入れられたりする経験は、自尊感情をはぐくみ、「生きる力」の源となる。 ・通年にわたり、日本のことばや文化、習慣に触れさせることで、生徒の日本での生活に役立つ取組を推進した。</p> <p>②教科学習に必要な基礎的日本語習得 ・年間を通して、国語の習熟度別少人数授業と日本語補習を行った。しかし、日本語指導専門の教員がいないので、指導方法や教材活用など、指導に対する限界も見られる。 ・12月 全国夜間中学校研究大会京都大会に全教職員が参加。全国から集まる参加者や教員との情報交換を通して、先進校の取組を学ぶとともに本校での取組の特質を学び、今後の本校のあるべき姿を模索した。夜間学級の法制化が推進されている今、特に東京の先進的な取組内容が印象的であった。</p> <p>③授業実践 ・1・2学期に昨年度までの「わだち」を教材として、教科指導・学級活動に活用した。 ・生徒の学力差、年齢差に応じて、習熟度別少人数授業や入り込みを行った。 ・国語の時間に詩の教材に触れさせるとともに群読等を行ったり、国語以外の教科でも日本語や日本での生活に必要な文化・情報などについて学習させたりすることで、細やかな情感の感得、日本語の表現力の向上に努めた。</p> <p>④研修 ・毎学期、生徒情報交流会・日本語担当者会を行い、一人ひとりの実態把握や指導方法について意見交換を行った。 ・10月に講師を招き、生徒向けの人権研修会を実施し、日本における外国籍の人々の思いと現実的課題を全校的に再認識した。</p> <p>(2)改善充実の成果について ・全教員が日本語指導に関わり外国籍生徒の思いに触れ、教育相談等の生徒理解の充実につながっている。 ・教科学習での理解度はともかく、授業をはじめとする学校生活全般に対する満足度が高まっている。 ・学校行事への生徒の積極的な参加が見られた。 ・健康面での生徒情報の共有や授業・学校行事での配慮により、校内では大きな事故はなかった。しかし、校外では生徒が3名病死した。独居生活をしている生徒も多く、孤独死という状況も視野に入れる中で、民生委員やケースワーカー等外部の諸機関との連携の必要性もさらに増している。 ・自らの過去を「わだち」で発表し、同じ思いを持つ仲間から受け入れられることで生徒間の人間関係の改善に役立っている。また、未就学により社会の差別や偏見を受けてきたつらい過去を乗り越え、社会に真正面から向き合う成長を見せている。さらに、日本の社会での常識的な考え方や生活の仕方を伝えることもできた。</p> <p>【大阪市立文の里中学校】 (1)本年度の取組について 前述のねらいを達成するため、本年度は、夜間学級生徒に適した教材作成と情報収集を柱に次のような取組を行い、実践に結び付けた。</p> <p>①教員研修 ・5月、7月、12月に校内で「教材・指導法検討会議」を開催し、生徒一人一人の実態把握と教材作成や指導方法について意見交換をした。また、学期ごとに反省と課題の確認を行うなど、学習指導や学習内容の改善、充実を図る場とした。</p> <p>②情報収集 ・年間を通して、近畿夜間中学校連絡協議会教材作成委員会に参加し、教材作成についての情報収集と意見交換を行い、成果を得た。 ・12月 全国夜間中学校研究大会京都大会の参加。</p> <p>③授業実践 ・研修や収集した情報を活用し、多様な学習内容と学習教材を準備し、全教科学習の基礎となる日本語の学習を重点的に行った。 ・学級内における生徒の習熟度の差に対応するため、チームティーチングを取り入れ、きめ細やかな指導で、意欲の出る分かりやすい授業づくりに結びつけた。 ・多様な日本語の表現方法を学ばせ、文章を綴り、生徒自らの思いを伝える生徒文集「雫」を作成し、日本語学習能力の向上につなげた。</p> <p>(2)改善充実の成果について ・研修により、生徒個々の状況について全教員の共通理解を図ることができ、個に応じた指導を推進することができた。</p>

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	東大阪市	<p>・学習指導に関すること</p>	<p>【東大阪市立長栄中学校】 本学級に在籍する生徒は年齢層も幅広く(20歳から80歳代)、国籍も多様(7か国)である。日本での在住年数は、戦前からの日本生まれである高齢の生徒もいるが、渡日からの年数が浅い「新渡日」といわれる生徒数が増えているのが現状である。 また在住年数の違いや渡日の経緯によって、生徒の日本語能力には大きな差がある。そのため生徒に対しての学習指導には様々な困難があり、生徒個々の状況に応じたきめ細かな指導が課題である。職員は教材作成に関して、互いに協力しながら調査・研究をしてきている。また地域に開かれた学校としてのスタンスのもと、様々な学習指導を通して、生徒が自己実現できる喜びや充実感を味わい、自らに誇りを持てる生徒に成長させたい。そして「生きた」日本語の表現力を身につけることをねらいとする。</p> <p>【東大阪市立太平寺中学校】 現在、様々な国籍や年齢層、様々な人生経験を経た生徒が、集まっている。その中で、生徒の表現力及び読む・書く力や日本語能力の向上を図ることをねらいとし、高齢の在日韓国・朝鮮人生徒にふさわしい授業内容の改善と、日本語の習熟度を考慮に入れた新渡日の外国人生徒のための授業改善及び教材開発を進めることが課題である。 国籍・年齢、生活歴、学習経験、文化などが多様化している集団の生徒ひとりひとりの理解を深めながら、状況に応じた効果的な指導方法・授業改善を研究する。</p>	<p>【東大阪市立長栄中学校】 本校では毎月定例としての職員会議と校内研修、及び太平寺中夜間学級との合同研修を位置付け、学校行事や日程の調整はもとより、夜間学級における学習指導や生徒に対する配慮事項についての検討や研修に努めてきている。特に日本語学習において、初歩的な生徒については、ひらがなやカタカナの学習から始めることとなるが、学習内容の定着を図るために視聴覚教材やICT機器の活用も工夫してきた。また丁寧な反復学習や有効な教材提示の仕方にも職員全体で研究してきた。さらに生徒個々に適した教材や指導法についても他府県・他市の教材をはじめ、調査研究を続けることで研修を重ねてきた。ニューカマーの生徒に対する指導だけでなく、日本在住の長い高齢生徒(日本人や在日韓国・朝鮮人、中国人生徒)に対しては、学齢期に学校に行けなかった経験や思い、戦前・戦後の混乱や被差別体験をひもとき、自らの言葉で文章化したり、発表したりすることに重点を置いてきている。その面においては、校区にとどまらず、多くの屋間の小中学校とからの交流会の要請を受け、本年度何回も交流会を実施できた。また夜間学級における学習の成果として、地域住民の文化祭や催しへの美術(絵画・彫塑)作品、書写作品等の展示にも現してきた。 そうした交流会や地域活動に参画することで、差別や戦争に反対し、平和で安らかな世の中・時代を望む夜間学級生徒の思いが現代の若い児童・生徒たちや地域住民に驚きと感動・共感を与え、伝わっていることが如実に見てとれる。また夜間学級生徒との交流において、真の国際理解教育につながる出会いにもつながっていると見える。 年度末にはその集大成として、それまでに学んだ日本語力で自らの思いや体験をつづるための作文指導を重視し、文集「おとなの中学生」としてまとめた。この取り組みは、生徒個々の学習意欲の継続とその効果を判断するものであり、さらに文集を市内各学校に配布することで、教職員・児童・生徒に読んでもらい、夜間中学生の思いを伝え、夜間学級の存在意義を啓発するものにとらえている。また文集に書かれた内容は、戦争を体験した者でしか語りえない貴重な体験であり、「生き証人」として、今の児童・生徒たちに「平和の尊さ」や「学ぶことの意味や大切さ」を学習することができる資料ともなるものと考える。</p> <p>【東大阪市立太平寺中学校】 ①本年度の取り組み 上記の「調査研究のねらい」を達成するため、昨年度同様、教職員研修の定例化と内容の充実、研修・講演会、公演行事等の実施、日本語指導の研究と推進、そして表現力の成果としての文集「おとなの中学生」の編集と刊行に取り組んだ。 ○教職員研修 ア. 定期的な研修 ・校内教科研を毎月、全教職員で実施。 校内教科研 4月:カリキュラム、表現 3回 ・今年度は全クラスにできるだけ複数の教師が授業に行けるように考えた。各クラスの表現の授業内容を共有して、進められるようにした。 6月:歴史、現代社会、生活、美術、表現 2回 ・6月にも表現を入れ、見直しを図った。 7月:生活、歴史、民族文化、表現 3回 9月:歴史、現代社会、生活、民族文化 2回 10月:表現、現代社会 2回 11月:民族文化、表現 1回 12月:生活 1回 1月:表現 1回 2月:表現、歴史、民族文化、生活、現代社会 2回 ・長栄中学校と毎月、研修を全職員で実施。 生徒の実態に即した教材のあり方を他校の教材も含め、検討し考えを深めた。 イ. 長栄中との合同研修 8月 1月 ・今年度は定期的な教科研はできていたが、統合問題で余裕がなく、講師を呼んでの研修はできなかった。 ○文集の編集と刊行 ・日々の授業、学級活動、学校行事を通して、生徒が自らの手で書いた作文を文集「おとなの中学生」としてまとめた。 ②改善充実の成果について ・新渡日生徒の占める割合が徐々に高くなってきているが、言葉の違いや習慣、気候風土の違いからくる生活面の困難をたくさん抱えている。公共機関、医療機関等本人ことだけでなく家族の問題などについても細かく気を配り、担任を窓口には話を聴くようにしてきた。特に医療関係の相談など、生活支援の相談が頻繁にある。本来、行政の窓口の仕事であるものではないかと思われることも学級担任に相談してくる。教員の支援の枠を超え無理な要求は断るのだが、中国語が堪能な教員が生徒の要望に自主的に応え、休日などにも支援をすることもある。このような支援が信頼を生み生徒の学校に対する登校意欲の向上につながっている。 ・日本語学習指導のありかたと生活に必要な学習内容を、校内での授業研を中心に検討し、授業の改善を進めてきた。日本での生活で共通する話題を工夫しながら、それぞれの日本語能力にあった教材を個別に作成し個人指導の時間もつくってきたことが、生徒の理解力や日本語力向上につながることができた。 ・在日韓国・朝鮮人生徒、中国・ベルー・ベトナムに加え今年度はタイの生徒にとつての基礎基本の学習内容、学習教材を校内研や教科研で検討してきた。また、長栄中との合同教科研や近畿夜間中学連絡協議会教材作成委員会の教材を参考に教材開発と指導法の工夫改善が見られた。 ・新聞の記事やインターネット、スマートフォン等を利用活用し、教材を作ることができた。 ・自分の書いた作文が印刷物になったり、交流会を通じて、大勢の子供たちの前で発表することは自信になり、達成感を感じることができるようになる。読むだけでなく書くということへの意欲は向上している。また自分たちの作品が展示されたり、発言はしなくても交流会などに参加することなどで同じ夜中生の発言を聴くことが、その後の学習の頑張りにも深く結びついていることがわかる。生徒が抱えている不安を理解し、生徒に自信をつけさせることが学力の向上につながっている。</p>

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	八尾市	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導に関すること 生徒指導に関すること 	<p>八尾市立八尾中学校夜間学級は、16～80歳までの様々な年齢層の生徒が在籍しており、多くの国籍(日本、中国、韓国・朝鮮、ベトナム、インドネシア、タイ)の生徒が学習している。また、外国籍の生徒の割合が90%を超え、日本国籍の生徒15名中11名が帰化・引揚である。入学時点で殆ど日本語を話すことのできない生徒が大半で、中には、母国語での読み書きができない生徒もあり、基礎学力の定着以前に日本語の修得が必要である。生徒一人ひとりの状況(生育環境の違いや、年齢からくる学習到達速度や学習の定着率の違い)を把握し、既存の日本語指導書を参考にできるだけ効果的な教材、指導方法を研究し、体系化していくことで日本語指導の充実を図ることが重要である。</p> <p>日本社会の中で不安定な生活をする者が多く、就学援助を受ける者約20%、生活保護を受ける者約15%、安い時間給、残業を引き受けざるを得ない者、不規則な労働時間 等から毎日の通学が困難な者も多い。それぞれの生徒の生活上の課題(家、部屋の借受の困難さ等)、社会上の課題(同国人同士でしか繋がらない狭いコミュニティ等)、日本語の修得状況、国籍等の関係を含む生徒間の相互理解(中国、ベトナム、韓国、朝鮮間の国際問題、習慣の違い等)や医療、生活習慣を含む生活指導の課題のために、個々の生徒の内面及び生活にも踏み込んだ指導方法の研究を推進する必要がある。</p> <p>生徒たちが日本の社会で安心、安全、心穏やかに暮らしていくための「生きる力」の育成を図ることが重要である。</p>	<p>◎本年度の取り組みについて</p> <p>○教育課程にのっとった授業の前段階としての日本語指導の充実のために取り組んだこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7組～4組までを国語(日本語)主体の過程で編成し、国語(日本語)習得の個々の生徒の状況に応じて7組→6組→5組→4組と進んでいく。前期・後期の2期に分け、半期ごとに学級編成を行った、可能な生徒は半期途中でも進級させた。学級編成に関しては教師の編成会議とともに個々の生徒との面談を重視している。 ・3組～1組では本来の中学校教育過程での編成であり、個々の状況により個別の指導を工夫した。 ・日本語指導は、クラスごとの指導目標を体系化しているが、その体系の再検討に着手した。 ・日本語指導力の向上のために、昨年度に引き続き大阪YWCAの日本語講師伊東和子氏にお願いして、日本語指導の教授法を学び、同時にお互いに指導する外国籍生徒の現状について情報交換を行った。 ・教材は全て自主教材を使っている。教員間で教材の紹介をし意見を交換し、研究授業で指導法の改善を試みている。また会議、打ち合わせにより各クラス、個々の生徒の学習状況、進捗状況、参考になっている文献の長所・短所の情報交換を行い、効率よく学習が進むようしている。 ○個々の生徒が抱える生活上の課題、生活指導を含む課題解決のための取り組んだこと。 ・総合学習の時間を利用して、日本社会での生活習慣・社会常識・マナー・ルール等を指導した。 ・進学を考える生徒にこれから道筋をアドバイスした。 ・仕事上のトラブル等に対する相談活動を行った。 ・義務教育期間中の子どもを持つ生徒に子どもの学習補助に対するアドバイスを行った。 ・成人した子どもの進路についての相談を受け定時制高校、職業訓練校等の紹介を行った。 ・生徒の生活相談に応じ、警察・弁護士への問い合わせを行った。 ・健康問題を抱える生徒の通院や結核検診等に付き添った。 ・家庭訪問期間を設け登校に課題のある生徒の相談活動を行った。 ・年3回の作文指導で、生徒の生い立ち、出身国のこと、現在の生活、将来の夢等を綴り、2回の発表会をした。お互いの生活を知り、仲間意識を育てた。 ・昼間の生徒たちとの交流により、夜間学級生自身が学ぶ意義を再確認することができた。また、民族楽器の演奏、昼間の中学生への演奏指導により自信を深めた。 ・生活習慣の違いや知識の不足等からくる生徒の偏った食生活の改善をねらいとして、和食文化紹介のための調理実習を行った。 <p>◎成果について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語指導力の向上をめざし研修を重ね、工夫を凝らしている。毎年新たな課題を抱えた生徒が入級し、個別の対応が必要となる。研修の必要性は尽きない。高齢の生徒の学習の定着率の悪さも課題である。 ・毎年新たな教材を必要とし工夫している。それが生徒の学習意欲を高めている。 ・生活相談や家庭訪問の結果、通学が改善した生徒もいる。 ・国語(日本語)指導の一環であると共に、生徒間の相互理解、国際理解、生徒の自尊心の育成等を目指しての作文指導とその発表も成果をあげている。他の生徒の苦勞を知り、苦勞をしているのが自分だけでないことを認識し、共に学んでいこうとする仲間意識を育てている。 ・日本語の不自由な高齢の生徒たちにとって夜間学級は大事なセーフティーネットとなっている。
	守口市教育委員会	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導(日本語指導)に関すること 生徒指導に関すること 	<p>主に下記の2点について取組み、今後の夜間学級のあり方についての研究を推進する。</p> <p>①第三中学校夜間学級には主に日本人、中国・台湾人、韓国・朝鮮人が在籍している。その中で日本人、韓国・朝鮮人は、高齢化のため病気に悩む者が多い。また中国からの引揚帰国した生徒や新渡日の生徒が約50%を占める。この引揚帰国・新渡日生徒は、日本の義務教育の学習内容を理解する以前に「日本語が話せない問題」を抱えている。</p> <p>以上の現状において、これら生徒の抱えている諸問題解決のための効果的な学習指導・教材のあり方や生徒指導のあり方について研究し、生徒の抱えている諸問題解決に資する。</p> <p>②昨年度、夜間中等義務教育拡充議員連盟が第三中学校夜間学級を訪問し交流会をもつことができた。しかし、公立中学校夜間学級の存在が、まだ世間一般に知られていない状況にはかわりがないため、第三中夜間学級の存在を多くの人に知ってもらうことが課題であると考えている。そこで、小・中・高の学校及びよみかき教室、社会人等との交流について研究し、今後の夜間学級のあり方に資する。</p>	<p>(1)本年度の取組について</p> <p>上記のねらいを達成するため、以下の取組を行った。</p> <p>①中国引揚帰国・新渡日生徒に対する取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第三中学校夜間学級は今年度、5学級編成であるが、中国引揚帰国・新渡日生徒の在籍する学級では、通常学級の授業に言葉の問題でついていけない生徒が大部分であるため、今年度も帰国間もない生徒(基礎A1)、初級(基礎A2)、中級(基礎B)、上級(基礎C)の4コースに分けて分割指導を行った。 ・中国引揚帰国・新渡日生徒指導のために翻訳・通訳(行事を行う際、必要に応じて中国語が堪能な講師やボランティア)を活用した。さらに、毎日の授業前に中国引揚帰国・新渡日生徒を一室に集め、1日の予定や学校生活のルール・マナー等を確認した。 <p>②小・中・高校生・社会人等との交流に関する取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第三中学校夜間学級の存在をより多くの人に知らせていくと同時に、自己解放や相互理解を深める等、より効果的な学びを探るため、今年度も、鳥取県立倉吉西高校、鳥根県横田中学校をはじめ、大東市や守口市、茨木市の小中学校等と交流を実施した。 ・また今年度は、10月7日に熊本県教委、11月5日に宮崎県議員・県教委の訪問があった。 <ul style="list-style-type: none"> ・文集「まなび」の作成 1年間の学習のまとめの一環として、文集「まなび」を作成した。 ・「みんなて語り合う会」の実施 講師を活用し、生徒が読み上げた作文原稿を中国語に翻訳した。その後の意見交流においても中国語の通訳を行い、生徒の相互理解を深めた。 <p>③高齢の生徒に対する取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任を中心に教育相談の実施や長期欠席者への家庭訪問、病気見舞い、郵送による連絡を適宜行い、家庭環境や生活実態・健康状態等を含めた生徒理解に努め、学習指導にも反映させた。 <p>(2)成果について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国引揚帰国生徒のきめ細かな指導のため、少人数習熟度別分割授業及び中国語の堪能な講師やボランティアによる翻訳・通訳を継続した結果、中国語が母語である生徒の諸行事への参加意欲が高まるとともに、学校生活のルールやマナー等を習得する期間も短縮された。また、学習上のつまづきはもとより、健康面や生活面での相談にも対応できた。今年度は、3月1日現在で2名の生徒が高校へ合格している。今後の課題として、平成27年9月受付時からネパール国籍、パキスタン国籍の生徒が入学しており、それらの生徒へのよりよい対応を模索中である。 ・交流会活動を通して、訪問者に夜間学級の存在と現状を知ってもらうと同時に、夜間学級生自身も自分の生い立ちを振り返り発表するなど、コミュニケーション力や言語力の向上について大きな効果をあげている。これは、文集「まなび」からも読み取れる。また、交流会活動は、高齢生徒の学習意欲の向上にも有効であると考えられるので、今後も交流会活動について継続的な取組を行うとともに、より効果的な交流会のあり方を検証していく。 ・高齢・病気・仕事等、様々な理由で学校に登校しにくい生徒に対して、担任を中心に、地道に教育相談の実施や長期欠席者への家庭訪問、病気見舞い、郵送及び電話による連絡を行うことにより、昨年度より除籍者が2名少なくなった。

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	豊中市	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導に関すること 生徒指導に関すること 	<p>様々な年齢層や国籍の生徒が在籍しており、高等学校への進学を希望する生徒も増えてきている。また、若い世代の新渡日生徒の割合が増え、生活習慣等の違いによりお互いを理解し、良好な人間関係を構築することが難しい現状がある。</p> <p>そのため、学習言語としての日本語能力の低い生徒や学習の定着が困難な高齢の生徒に対する個に応じた教科指導と学校教育におけるすべての場面で、人権を基盤とした教育の推進が課題であると考えている。</p> <p>そこで、国語・数学におけるきめ細かな指導方法の工夫改善、コミュニケーション力を高め、良好な人間関係を築くためのカリキュラム及びコース編成について研究するとともに、総合的な学習の時間等における生徒の自尊感情を高める取組みについて研究し、生徒一人ひとりが安心して学べる夜間学級を目指す。</p>	<p>○国語・数学に関する系統的な教科指導の研究</p> <p>○学習諸活動における生徒理解</p> <p>習熟度別学習に取組むことで生徒の学習に対する意欲を高めるため、生徒一人ひとりの学習能力や生徒の思いを把握するために小テストや面談を実施し、コースを決定した。</p> <p>国語は、昨年度に設置した基礎の基礎を学ぶコースで力をつけることができたため、5コースから4コースに戻し、日本語でのコミュニケーションに課題がある新渡日生徒を中心に初級文法を学ぶコースから、中学校国語の内容及びその発展的な内容までも網羅するコースまで、習熟度別の授業を展開し、複数の生徒の中でコミュニケーションを取りながら学ぶことができた。</p> <p>また、とよなか国際交流協会との連携を密にすることで、年々変化していく生徒の国籍や年齢構成に、よりの確に対応することができ、外国籍生徒の実態を踏まえた授業づくり等にとても役立った。</p> <p>数学は、1桁の足し算・引き算を学ぶコースから中学校数学の教科書にある内容を学ぶコースまで、習熟度別の3つのコースを設定し、きめ細かい指導を行うことで学習の定着が図れた。</p> <p>国語・数学とも生徒の実態に応じた年度途中でのコース変更など柔軟に対応するとともに、習熟度別に分かれたコースでのチームティーチングを実施することにより、生徒の実態に合わせたよりきめ細かい指導を行うことができ、学習の定着を図れた。</p> <p>さらに、年間を通じて、相互の授業を見学し、話し合う等の授業交流が、教職員一人ひとりの授業力向上に効果があり、きめ細かな指導方法について、さらに工夫・改善を加え、より生徒の実態に即した教科指導の在り方を研究することができた。</p> <p>学習教材では、個々の生徒の生活実態に即した日常生活に活かせる内容を大切にし、生徒が達成感を得られるような教材作成を工夫したことにより、学校で学んだことが、日々の生活の中で役立っていることが実感でき、学習意欲を向上させるとともに、学習内容を定着させることができた。</p> <p>学習したことが定着するとともに、生徒の学習意欲が向上し、自ら高い目標に取組む姿が見られるようになった。</p> <p>学び、生きることに自信をつけた生徒は、生徒間や教職員との良好な人間関係を構築することができるようになり、極めて大きい成果を得ることができた。</p> <p>・3月 校内研修 講師 金 相文（とよなか国際交流協会事務局長）「豊中における多文化共生の取り組み～国際交流センターの活動から～」</p> <p>○コミュニケーション力向上のための指導の研究</p> <p>授業開始前や30分間の休憩時間には、できるだけ教職員も生徒とともに時間を過ごす中で、生徒の状況を把握し、生徒どうしをつなぐ会話を心がけた。10月の校外学習や周年行事へとつないでいくことができた。</p> <p>創立40周年の記念行事では、在校生の発表として朗読劇を堂々と演じるとともに、卒業生による記念講演「私の人生と夜間中学校」を聴くことができ、生徒、教職員にとって大いに学ぶことができた。</p> <p>授業では、家庭科で調理実習を行い、料理の得意な生徒は活き活きと授業に参加し、お互いに協力しながら、とてもいい雰囲気の中で授業を行うことができた。美術では油絵に取組み、集中して作品づくりに取組むとともに、教師の支援のもと、自分の作品が少しずつ目指すものになっていくことに大きな達成感が見られた。</p> <p>3学期の校内作品展では、国語・数学・理科・美術・技術家庭等での成果を広く一般にも周知する機会となり、周りからの評価を受けることで、生徒が達成感を味わい、さらなる学習意欲の向上へとつなげることができた。</p> <p>日常の会話や、授業中にみんなで話し合いながら何時間も、何日もかけて一つの作品に取組んだり、お互いにいたわりながら体育で体を動かしたり、自分で考えや意見を出し合い、共同作品を作り上げたりする中で、人のことを思いやり、一つのことに集中する根気が生まれ、自分に自信が持てるようになるとともに、コミュニケーション力を高めることができた。</p> <p>また、屋間部の児童・生徒との交流を積極的に行うことで、夜間学級生徒の自己肯定感を高めるとともに、屋間部の児童・生徒にとって、学ぶことの意義を伝えることができた。</p> <p>・10月 創立40周年記念行事(在校生発表)</p> <p>・12月 豊中市立中豊島小学校(5年生)との交流</p> <p>・1月 校内作品展、第五中学校生徒との交流</p> <p>・2月 近畿夜間中学校連合作品展</p> <p>○夜間学級における取組み資料の整理・活用</p> <p>これまで蓄積してきた取組みの記録であるフィルムネガをCD化し、記録として残すことで、振り返りを行った。</p> <p>生徒は、これまでの取組みを知ることで、自分たちのやるべきことが自覚でき、よりいいものを創っていかうとする意欲へとつながっていった。</p>

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	神戸市	<p>【神戸市立丸山中学校西野分校】 学習指導に関すること ・個に応じたきめ細かな学習指導法の研究。 ・日本語の学習を効果的に進める研究。 ・地域に開かれた学校。 ・「夜間中学校の存在」を周知させるための公開授業の展開及び広報活動の拡充。 ・地域や定時制高校との交流を深め、進路指導を推進し、夜間中学校への理解・認識を深める。 【神戸市立兵庫中学校北分校】 学習指導に関すること ・始業前に日本語指導の授業(0時間目)を設定し、母語別に日本語学習を系統的に推進する。 ・基礎学力の定着を目指した学習指導法の研究と実践。 ・辞書や電子辞書等を活用し、自主的な学習を推進する。 ・定時制高校と交流を深め、進路指導を効果的に推進する。 ・公開授業を実施し、本校の実践内容や授業の様子などを内外に伝える。</p>	<p>【神戸市立丸山中学校西野分校】 在籍生徒の国籍及び年齢層の多様化が進展している。ここ数年の傾向として、在日韓国・朝鮮、中国帰国者の呼び寄せや結婚等で来日した生徒にとどまらず、就労ビザで入国した家族による中国籍、ベトナム籍その他の若い来日者の増加が目立つ。これらの生徒たちの母国での就学経験は様々で、この現状に対して「個々のニーズに応じたきめ細かな学習支援」の必要性が大きな課題である。毎年、授業形態については生徒の日本語の習熟度及び就学経験を中心に検討をしているが、本年度も生徒の状況に見合った授業形態の工夫を進める。少人数授業に加え、特に国語の時間及び理科、社会科の学習内容の中に日本語・識字の学習の時間を組み入れる。さらに、生徒には書く・読む・聴く・朗読・発表等の機会を増やし、文化発表会での発表、学びの記録「にしの」のまとめの発表につなげる。また、日本語指導用に開発した、個々の能力に応じた教材や資料を系統化し、進度ごとに整理し、研究会・交流会の資料等として、さらなる学力の定着・向上を図る。 【神戸市立兵庫中学校北分校】 生徒の学習言語である日本語運用能力の差が大きいのが現状である。希望生徒に対して始業前に1時間程度、日本語指導を行っている。また、長期休業中に希望生徒に対して、学習教室を行ったり、生徒の能力にあった宿題を工夫したりするなど、日本語習得に力を入れている。このことにより、授業内容の理解と学力の定着を図る。 国語(8クラス)・数学(5クラス)・英語(6クラス)のグループに分けた少人数授業を実施し、個々に応じたきめ細かな学習ができるように工夫した。音読・輪読指導を各教科の学習に取り入れ、文化祭や作文発表会で、自分の考えや思いを相手に伝えることができるようになることにより、達成感、充実感を与えたい。 課題としては、系統的で効果のある指導法の定着があげられる。また、生徒が自主的に学習できるように辞書や電子辞書等の教材や機器を多く導入し、学習効果や意欲を高め、基礎学力の定着を図ることが求められている。 これらの成果を整理保存して、各種研究会での資料とするとともに、より分かりやすい指導や指導形態の在り方の研究を行い、基礎基本の定着をねらいとする。</p>	<p>【神戸市立丸山中学校西野分校】 ①教科打合せ会とクラス編制検討会 ・5教科の授業では、3学年3クラスを学年単位ではなく、生徒の各教科の習熟度を基準に学習集団(A～Fの6グループ)を編制し、少人数授業(3～6人)を実施。きめ細かな指導により、生徒たちにはわかる喜びを実感させ、自信に繋げている。 ・毎月教科打合せ会を開き、生徒個人毎・教科毎の学習の進捗状況を報告・確認し、学習状況を共通理解している。その結果を受け、1・2学期に計6回全職員によるクラス編制検討会を開き、個々の生徒の学習評価を実施。到達度(主に国・数・英)が向上した生徒は、より適正なクラスへの編制変更を行った。これにより生徒が習熟度に応じて意欲をもって授業に取り組めるようになった。また、特に1年生では、日本語運用力強化のため、社会・理科の授業を国語に置き換え、日本語・識字中心の授業を展開した。 ②文化発表会 ・文化・民族・言語の違いを超えて力を合わせて共同作品を作成。「完成した時の喜び」を共有するとともに、達成感を味わった。また、舞台演技でも協力して演技や出し物を創る過程で共同体意識や和の心を育成した。 ・ここ数年、丸山中学校吹奏楽部による演奏と太田中学校の1年生全員による合唱があり、その迫力あるステージを生徒も楽しみ、互いに共生・共感を育む場となっている。 ・生徒の主体性を育てるために、舞台の司会・進行は自らの手で行った。 ③紀要「にしの」の作成 ・自らの体験を作文に綴ることを通して自己を振り返り、学ぶことの喜びと素晴らしさを実感し、夜間中学で生活することの「幸せ」を確認した。 ・作文発表会で、様々な年齢・国籍の仲間の体験や思いを聞き合い、読み合うことで仲間としてお互いの理解や共感を深める場を持った。 ④進路指導 ・入学時の動機調査では「教養・学力を身につけたい」、「日本語を習得したい」が主たる動機となっていた。しかし、3年間の学習を積み重ねるにしたがって、年齢による体力の不安や日本語の習得の難しさを感じながらも、分かることの喜びや自信から、さらなる学習の継続・発展、資格の取得等に強い関心を持ち、学年途中から定時制高校への進学を希望する生徒が増える傾向にある。 ・進路学習では、高校側の理解と協力を得ながら、3年生だけでなく、1・2年生の希望生徒にも定時制高校の学校体験・見学会への参加を呼びかけ、高校での学習や生活についての理解を深めることにより、進学への不安を取り除くことができた。 ⑤交流活動 ・本校の丸山中学校生徒会を中心として「クリスマス会」「餅つき大会」を実施。職員はもとより、生徒同士の交流も図ることができ、本校・分校がより身近な存在となった。 ・「3年生を送る会」では、太田中学校生徒会と交流。また2学期には太田中学校の3年生全員の生徒を対象に分校生が体験談を語ったり、質問に応えたりするなど、より活発な交流を通して夜間中学校に対する理解が深まった。 ・神戸識字交流会(公民館7館・定時制高校2校・夜間中学校2分校・識字教室6教室)に、本年度も作品出品と代表生徒の体験発表という形で参加。同じ悩みや共通体験を持つ人との交流や他の団体の取り組みについて知ることで「識字」に対する多くの意見や考え方にも触れる機会となった。 ・従来、生徒の家族を対象として実施してきた「授業公開」を今年度より「夜間中学校の存在をより周知する」という趣旨から、神戸市内の全公立小中学校へも参観を呼びかけ、特に「若い教師」への参観を促した。生徒が学んでいる姿、教師と生徒が一体となった学習は、若い教師たちに「学びの原点」について考える機会を提供し、また生徒たちにとっても大きな励みの場となった。 ・兵庫中学校北分校や尼崎市立成良中学校琴城分校と合同職員研修を実施。効果的な学習指導方法や教材等の意見交換を行い、今後とも継続して共同研究を行っていくことを確認した。 ・「開かれた学校」として、希望に応じて市内外の教育関係者や行政・立法関係者、また広く一般市民等々にも研修機会の場の提供を行っている。今後とも夜間中学校に対する理解・認識を深める機会として積極的に受け入れていきたい。 ⑥タイムリーな職員研修の実施 ・研修1:本校における道徳の取り扱いについて ・研修2:評価について ・研修3:兵庫北分校との交流会 ・研修4:道徳授業模擬演習 ・研修5:形式卒業生の受け入れについて ・研修6:心肺蘇生法について 職員構成10名という小規模校だからこそ可能となる、西野分校の現状を踏まえたタイムリーな内容での全職員参加の研修会を実施。 【神戸市立兵庫中学校北分校】 ①学習指導の充実 ・授業理解を深め、基礎学力の充実を図るために、授業前に「0時間目」と称して特別学習(約1時間)を実施。新渡日者に対しては、「みんなの日本語」を教材として活用し、個別指導を行った。YWCAから日本語指導の支援として講師を招き、本校の教師と共に指導することで教授法の体得を図るとともに、生徒の日本語能力を向上させることができた。 ・国、数、英について習熟度別にグループ分けを行い、少人数授業を実施、個に応じた授業ができるように心がけた。 ・日本語の書く力を高め、日本文化を理解するために、国語の時間だけではなく総合の時間も利用し書道の練習に取り組んだ。その成果を文化祭で発表した。また、3学期の始業式には、全員で書初めを行った。作品を校内に展示するとともに、優秀作品は書道展にも出品した。 ・日本語指導研修やICT活用研修、「やさしい日本語」研修などを行い、授業改善に役立て、よりわかりやすい授業の推進に努めた。 ・自主的な学習意欲の向上を目指し、夏休みに希望者に夏季学習会を実施。個別プリントを準備し、基礎学力の向上を図った。 ・成良中学琴城分校、丸山中学西野分校と職員研修を合同で実施した。授業方法や内容、課題等について意見を交換し、お互いの良い点を取り入れるように努めた。 ②教科打合せ会 ・全クラス、全授業で複数指導を実施しているが、よりきめ細かな個別指導を可能にするため、教師間の連携を密に毎週教科打合せを行い、共通理解を基に指導を行った。 ③校外学習 ・春は、須磨水族園、秋には姫路方面(アサヒ飲料・姫路城等)の校外学習を実施。学活・社会・理科の授業等で資料・映像・インターネット等を活用し、きめ細かな事前・事後学習を実施した。 ・見学地についても、観光地だけではなく、学習により役立つ工場見学も取り入れた。 ④兵庫中学校本校との生徒交流会 ・本校生徒会を中心として、交流会を実施。夜間中学校の歴史・現状の説明・紹介を行った。最初に各教室での分科会を実施し、自己紹介後、共に学習をした。次に、物づくりやゲームを一緒に協力しながら取り組んだ。最後に質疑応答の時間を設定し、相互に質問や意見交換を行うことで交流を深めることができた。 ⑤運動会 ・今年度も兵庫中学校本校の教員の積極的な参加、協力を得て、ひとつの競技を生徒、本校職員、分校職員が協力して行い、ゴールした時の達成感を互いに共有し、心がふれあえる場となった。 ⑥文化発表会 ・展示では、年齢・国籍・民族・文化の違いを乗り越えて、習字、美術、理科、技術家庭科の授業で制作した作品を展示し、達成感や充実感を体感することができた。 ・舞台では全生徒による唱歌の斉唱とアルトリコーダー、ハンドベル、ギター、キーボードによる合奏をすることによって、互いに協力する和の大切さを味わうことができた。また、3年「発見！日本でSHOW」2年「北分校からこんばんは」と題して、個々の生徒がそれぞれの体験や学習してきたことを発表することで互いの思いや考えを伝えることができた。また、1年生は「朗読 はなさかじいさん」を通して日頃の日本語学習の成果を披露することができた。 ・本校の文化祭にも作品や夜間中学校の紹介を展示した。また、展示見学も行い、より幅広い交流となった。 ⑦作文発表会 ・様々なテーマを通して自分の考えや思いを作文で表現し、各学年の代表生徒が作文を発表した。共に夜間中学で学ぶ生徒間の理解と共感を深めることができた。 ⑧神戸識字交流会 ・作品出品と代表生徒の体験発表を行っている。定時制高校、夜間中学校、識字教室で学ぶ方々と交流した。また、日本語の読み書きに悩みを持つ方々と思いを共有することができた。</p>

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	尼崎市教育委員会	学習指導に関すること(日本語)	中国から帰国した生徒や来日した外国人生徒の増加に伴い、日本語の初期指導が急務である現状の中、生徒に適した日本語指導教材の作成が必要である。本校の生徒の実態に即した、独自の日本語指導補助教材を研究し、作成するとともに、教材の使用を含めた効果的な指導方法を研究することにより生徒の日本語能力及び教員の指導力の向上に資する。	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を母語としない生徒を対象とする初級レベルのクラスにおいては、特に、過年度に作成した補助教材集で採用したイラスト等の視聴覚教材を補助教材として使うことで教員の指導がスムーズに進められた。 ・日本語を第二言語として学ぶ生徒は、文字としての平仮名を覚えることができても、平仮名を用いる語句を理解することが容易でないことが多い。そこで、昨年度作成した補助教材集は、自学自習用として活用した。 ・補助教材集は、平仮名・片仮名の練習に加えて、小学校二年生で学ぶ国語漢字の練習を取り上げ、作成した。 ・日本語指導の専門家を講師に招いて適切な指導助言をしていただき、全教員にとって本校での教育実践のあり方を示唆する知見を得ることができた。 ・教材作成委員会や授業後の研究協議等の職員研修会での議論を通して、日本語指導の授業作り、教材の種類、作成方法、活用方法等に関する意見を交換し、指導改善の意欲を高めることができた。 ・他府県の夜間中学校の実践を学ぶ機会を作り、教育課程や教材など先進的な取組について情報を得ることができ、自校の教育活動の改善に向けて参考になった。 ・教育内容の研究を進めたところ、日本語の基礎的な能力を身に付けることにつながる教科学習の内容をさらに研究し、開発する必要があることがわかった。 ・生徒の実態が多様であること、すなわち、日本人生徒と外国人生徒といった単純な区分だけでなく、母語が日本語である生徒、日本語ではない生徒、さらに漢字圏の母語を有する生徒と非漢字圏の母語を有する生徒、年齢が高い生徒、年齢が低い未成年の生徒、青年期や中年世代の生徒、就労している生徒や非就労の生徒、高等学校等への進学を希望する生徒、この学校で生涯学び続けることを望む生徒等、実に様々な学習欲求の集まりであり、教育課程のあり方について議論を重ねているが、教育課程の編成に加え、学習集団の編制のあり方が大きな課題である。 ・日本語を初歩から学ぶ生徒が自主的・自立的に学ぶために役立つ補助教材作りも今後の課題である。 ・何気なく使っている日本語の語句が、様々な意味を持つ語句であるために、生徒の学習課題の理解を困難にしている場合があることや、今後、「学習言語」と呼ばれる、教材や指導場面で使用する日本語(用語)を研究し、「指導用日本語語彙リスト」のようなデータベースを作成したり、言語使用を教師が十分に意識し、適切な配慮をしたりすることが望ましいことがわかった。 ・日本の教科書にでてくる「学習言語」であっても、国によっては翻訳することが困難な日本語があることが、多文化共生サポーターの協力によりわかってきた。そのような学習言語をどう理解させるかも今後の課題である。
	奈良市	学習指導に関すること	本校の生徒は日本国籍だけでなく中国・韓国等の多様な国籍を有し、その来日の時期や理由も一律でないことから、日本語の習熟度や学習状況も様々な生徒に対する学習指導が課題であると考えている。そこで生徒一人一人の学習の状況を的確に把握する方法及び個に応じた指導の在り方について研究することで生徒の学力向上に資することをねらいとする。1年間の学習のまとめとして文集「かすが」を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> 【1学期】 ・在籍する生徒を出身国や来日の理由ごとに以下のようにグループ分けし、それぞれのグループの日本語の習熟度に応じた日本語指導を実施した。 ①国からの帰国者(残留孤児)グループ 中国語は話せても読めない。日本語は話す、書く、読むともに不十分な状態であった。平仮名・カタカナの書き写し学習から始めた結果、漢字の読み書きはできるようになった。 ②中国からの新渡日者グループ 中国語・英語は話せるが、日本語の話す力は個人差がある。説明の際、個に応じて日本語と英語を使用しながら指導した結果、簡単な日本語の読み書きは出来るようになった。 ③韓国からの新渡日者グループ 日本語を少し話せ、書くこともできる。指導者が韓国語を話せないで、文法の説明は困難であったが、韓国語訳を添付したプリントを使用しながら指導した。 ④フィリピンからの新渡日者グループ 日本語が少し理解できるので英語を使用しながら平仮名から指導を始めた結果、きちんと書くことはできるようになった。 【2学期】 ・校内研修 第61回全国夜間中学校研究大会分科会発表に向け、校内研修を実施した。 ・先進地視察(京都市立洛友中学校夜間部 11月9日) 昼間部と夜間部の生徒が合同で学ぶ形態をとり、学年・学級の枠を越えて柔軟でゆとりある教育課程を編成し、生徒一人一人にあった指導を工夫している状況を視察した。 【3学期】 ・校内研修 奈良教育大学 特任准教授 藤田美佳氏を講師に招き、「夜間中学の法制化をめぐる」に関しての講義をいただいた。 【その他】 ・学習者の日本語能力だけではなく個々の生活実態や必要としている力を見極め、教材や学習内容を準備することが大切であり、学習効果も上がる。そのため、指導にあたっては個々の生活状況等の聞き取りを行い、教職員間で共有することとした。

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	天理市教育委員会	学習指導に関すること 「生徒の相互理解と結びつきを深める教材作成と研究」	<p>本学級では、戦争・差別・貧困・病弱・障害などが原因で、学齢期に教育の機会を十分に保障されなかった人たちが戦後中国に取り残され、その後帰国した人たちとその家族、結婚や仕事で主にアジア・南米地域から渡日した人たちなどが学んでおり、民族、国籍、母語、文化、生い立ち、価値観、学習歴など多様な背景を持った人同士が、共に学校生活を送っている。</p> <p>本学級では、「学ぶことは、生徒が自らの人権を回復していく重要なプロセスである」と捉え、成人市民としての生徒が学習によって自らの生活課題に取り組み、自尊心を回復し、積極的に社会や人とつながることができる力を高めていくことに重点を置いた学習を進めている。その学習目標の達成には、様々な違いを持った生徒が「自己と他者の違いを知り・理解し・認め合う」ための教室活動や教材の工夫が大切である。またそのためには、まず教員自身が夜間中学の社会的な存在意義と特有の教育活動の目的・方法、生徒の実態を十分理解することが必要である。</p> <p>そのため、今年度は次の点について研究を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 多様な違いを持った生徒一人一人の関係性を深めるための教材作りとその活用の工夫 * 上記下線部についての職員研修 * 本年度の調査研究取り組み実施状況 	<p>* 本年度の調査研究取り組み実施状況</p> <p>①6月24日の職員会議において、本年度の調査研究内容の一つである「多様な違いを持った生徒一人一人の関係性を深めるための教材作りとその活用の工夫」について具体的な研究の進め方について検討を行った。その結果、ことなる社会的背景を持つ数名の生徒の生活作文及び聞き取りを素材にして、生徒相互の関係を深めるための教材集を作成することになった。本校の生徒の学習進度は様々であるため教材集の日本語の表記については、生徒の作文及び聞き取りを常用漢字に全て変換し、ふりがなのないものから、学習進度に応じ、漢字表記にふりがなを付けた物までを作成し、それぞれの生徒の作文及び聞き取りの内容・人となりについての設問を設け、各クラスでの一斉授業の中で生徒理解につながる教室活動がしやすいように工夫を加えることにした。設問は、教材集の趣旨を教材集に取り上げた生徒さん一人一人に「自分のことを級友に知ってもらうのに、どんなことをみんなに考えて欲しいか」を尋ね、意見を求めた上で内容を考えて。教材集は1学期末をめどに完成させ、2学期に各クラスでの授業で、クラスの授業の進度や実情に合わせて活用をした。また、作成教材集のデータ保存記録とクラスでの個々の生徒に合わせた教材の再加工用データを作成するためにメディアにデータを記録した。</p> <p>②また、生徒の相互理解を促すための作文集で取り上げた生徒も含め、以下の日程で作文発表会を実施し、生徒の相互理解を深める機会を設けた。当初は、3回の発表会を予定していたが、生徒の作文作成の進捗状況から、2回の実施とした。</p> <p><7月24日>生活作文発表会1 王露「日本に来てから」 松本まさ子 「砂の器」を見て <1月29日>生活作文発表会2 趙渭済 若い人たちに伝えたいこと 後田アサ子 金沢にいた時の思い出 長澤麻里 一泊校外学習 金燕珍 満蒙開拓平和記念館を見学して</p> <p>③教員自身が夜間学級の社会的な存在意義と特有の教育活動の目的・方法、生徒の実態を十分理解するための研修として、以下の研修を行った。</p> <p><7月15日>校内職員研修1 夜間中学の教材作り(講師招聘) 本学級で長年勤務し、現在大学等で夜間中学に関わる講動を行われている福島俊弘さんをお願いし、夜間中学特有の教育活動の目的・方法についての見識を深めるためのお話をいただいた。</p> <p><12月4日>先進校視察1 京都の公立夜間中学 常勤職員6名を派遣し、全国夜間中学研究大会に参加し、全国の夜間中学の取り組みについて見識を深めるためための研修、また、京都市立洛友中学校の見学を行い、先進的な取り組みを知るための研修を行った。</p> <p><1月>先進校視察2 奈良県内自主夜間中学 奈良県の夜間中学の原点である自主夜間中学へ、勤務経験の浅い職員を派遣し、研修を行った。 1月12日 西和自主夜間中学見学 1名 1月19日 西和自主夜間中学見学 1名 2月1日 吉野自主夜間中学見学 1名</p> <p><2月3日>校内職員研修2 夜間中学の歴史 夜間中学勤務経験の長い教員が講師となり、戦前から現在までの夜間中学の歴史についての講義形式の校内研修を行った。</p> <p>* 取り組みの成果と課題： 教材集の作成過程において、他の生徒に知って欲しいことという観点で教員が生徒といっしょに設問を考えることで、担当教員が改めてその生徒の新たな実態や思いに気づき、そのことが教材集を実際に使った相互理解のための教室活動を効果的に行うためのヒントにすることができた。また、実際の教室活動で、授業参加生徒には、教材集の作成目的やその過程も説明をした上で、授業を行ったが、作文を一斉音読やパート音読した後、設問を考えることで、普段離れた教室で学習している生徒・同じ教室で学習している生徒、日本語の理解度の違いから話題が限られている生徒への理解を深めることができた。さらに生徒が全員集まる夕食時には、学習したことを話題にして、生徒同士のコミュニケーションが深まる場面も見られた。</p> <p>作文発表会については、前年度の作文発表会の反省から、今年度は、単に作文を読み、参加者に感想や意見を求めるという手法をさらに発展させ、作文を発表した生徒の背景や作文に書かれている内容についての理解を深めるために、発表予定の生徒と担任の教員が相談し、作文の内容の背景や内容自体の様子などを画像や映像なども交えて、作文発表と同時に、発表者自身が担任の教員と紹介する取り組みも合わせて行った。その結果、参加者からは、作文の内容がわかりやすかったという声が多く聞かれ、質問や感想を発表する生徒の人数が増加し、積極的に他の生徒の体験や思いを理解しようとする姿が見られた。</p> <p>職員研修については、全国夜間中学研究大会への参加、先進校への視察を通じて、各地の生徒が負っている社会的背景に合わせた、様々な形態の夜間中学があり、取り組みも様々であることが理解でき、本学級教員が夜間中学の社会的意義を考える良い機会とすることができた。自主夜間中学への見学では、ボランティアで取り組まれている講師の方々の熱心な姿と受講生との信頼関係の深さ、また学校自体の家族的雰囲気に触れることができ、教育技術を考える以前にその前提となる教員としての生徒を思う気持ちや教育への熱意な自分の夜間中学の教員としての根本的な資質や教員と生徒、生徒同士の信頼関係を作るための心構えなどを再確認することができた。校内研修では、教員自身が自己研修をしながら、講師役を務め、夜間中学の歴史を振り返ることで、本学級の現状と現在の取り組みを夜間学級の社会的意義という観点から捉えなおす良い機会となった。また、本学級の元教員を招へいしての校内研修では、特に具体的な日々の教材作り、学習対応について、非常に意味深い示唆を得ることができた。</p> <p>今年度、以上の様な多くの有用な成果を得ることができたので、今後も同様の研究を継続実施することで、本学級の生徒の相互理解を深めていきたい。</p>

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	広島市	学習指導に関すること 「生徒の相互理解と結びつきを深める教材作成と研究」	<p>【広島市立二葉中学校】(学習指導に関すること)</p> <p>本校の在籍生徒は、ほとんどが中国からの帰国者・入国者と諸外国から就労や結婚などのために入国した者である。10代から60代までと年齢層が広範囲にわたり、さらに学習歴も異なる現状において、日本語の習熟度も違う生徒への教科指導が課題であると考えている。これらのことから、生徒一人一人の状況に応じた効果的な指導や教材の在り方について研究し、生徒の学力向上に資することをねらいとする。</p> <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本語の習熟度が低い生徒に適した教科指導 学習の習熟度に差がある生徒への教科指導 母国語が不十分な生徒への日本語指導及び教科指導 日本語学習から教科学習を主とした学習へのスムーズな移行 (その課題を持つこととなった背景) 10代から60代までと言う幅広い年齢層、修学年数の違い、また日本での滞在期間・生活状況などの違いにより、各生徒の日本語習得状況や学習の習熟度に差がある。(参考資料1参照) 中国語の読み書きが困難な生徒は、中国語の解説書も役に立たず、理解することが難しい生徒がいる。 日本語学習を終え、教科学習が主になると学習意欲が低下する傾向の生徒もいる。 <p>以上のことから、日本語学習から教科学習への効果的な指導方法を探る必要がある。 【次頁へ】</p>	<p>【広島市立二葉中学校】</p> <p>(1)本年度の取組について</p> <p>上記のねらいを達成するため、本年度は、教員研修と情報収集を柱に次のような取り組みを行い、実践に結びつけた。</p> <p>①教員研修</p> <ul style="list-style-type: none"> 4月 第1回研修会 指導者全員で研修を行い、本年度の生徒状況を把握するとともに各学習グループにおける各教科の年間指導計画を立てた。また、評価方法について共通理解を図った。 7月 第2回研修会 個々の生徒の学習状況や習熟度等について情報交換を行い、生徒一人一人の実態を把握し、教科の指導法や教材作成について検討し、学習指導や学習内容の充実・改善を図る場とした。また、評価規準などについて研究を行った。 10月 第3回研修会 前期の学習状況の確認と生徒状況の把握を行い、後期の取組内容の確認を行った。また、評価方法についても再確認した。 2月 第4回研修会 年間カリキュラムや評価、学習指導、生徒指導など、各項目について今年度の成果や課題を出し合い、意見交流を行った。 3月 第5回研修会 今年度の成果や課題をまとめ、来年度へ向けての準備を行った。 <p>②情報収集</p> <ul style="list-style-type: none"> 12月 京習府京都市立洛友中学校夜間学級を視察した。 <p>国語・社会・数学・英語の授業見学を行うとともに、見学後は生徒とも交流した。また、他校の教員との情報交換を通して、補助教材の作成や指導方法についての情報を得ることができた。</p> <p>③授業実践</p> <p>研修や収集した情報を活用して、生徒の実態に応じた教材を作るなどしてわかりやすい授業づくりに努めた。また、日本語の理解力や学力差の大きい授業では、個々にあったプリントを用意するなどして、個々に応じたペースで学習ができるようにした。</p> <p>また、外部講師による指導や作文発表会など様々な体験を通して、より実践的な日本語に触れさせ、学習意欲の向上に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽(特別授業) 音楽講師を招き、歌やいろいろな楽器演奏の鑑賞、楽器の体験、講師の先生と一緒に日本語で歌を歌うといった学習をした。さまざまな活動を通し、音楽の楽しさや素晴らしさを深く実感でき、その後の学習への意欲を高めることができた。 作文発表会 日本語のレベルに合わせて作文を書き発表した。「書く・話す(読む)・聞く」という活動で、日本語を話すことに自信をつけさせることができた。縦書きに書くこと、読むことに慣れさせることができた。 <p>(2)改善充実の成果について</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科指導においては、教科担任で各学習グループ・個人に適した教材を作成することにより、生徒の実態にあった指導を行うことができた。より身近な題材を教材として学習内容を取り入れることで、生徒の興味や理解度を高めることができた。 日本語学習の段階から教科の学習をするということは定着しつつある。教科の学習にも積極的に取り組む姿勢が見える生徒もいる。学習内容を深めることができ、日本語にも広がりが見えてきている。 日本語の単語学習や漢字学習では、パワーポイントや絵カード等を使いバリエーションをつけて学習した。繰り返し学習することで覚える単語量が増えた。また、非漢字圏の生徒には、漢字と絵カードを同時に提示して学習をすすめたことで覚える漢字も増えた。理科では、ビデオ教材を取り入れながら授業を進め、興味を持たせることができた。ICTの活用は、生徒がわかりやすく理解しやすいので有効であった。今後も積極的に活用したい。 学習内容や生徒状況について情報交換を行うことにより、教材作り等に役立てることができた。また、共通の指導内容を確認して授業を進めることで、繰り返し学習することが多くなり、力をつけることができた。 出席が安定している生徒については、個々の力に応じた教材を提示することで、集中して学習に取り組み順調に学力が向上する。しかし、健康面や仕事、家庭の事情などで出席が安定しない生徒も多く、計画通りに学習を進めることが難しかった。欠席生徒への学習支援の方法や対応は今後の課題と考えている。 日本語の習熟度の差も大きいので、教科学習の習熟度の差も大きい。限られた教員数と時間数の中で、教科学習での習熟度別授業をどのように実施するかが今後も課題である。また、高校受験を希望する生徒と希望しない生徒を同じ学習グループで編成せざるを得ない場合、使用教材等十分な検討と配慮が必要である。今後も指導法のさらなる工夫・改善を図ることが必要である。 【次頁へ】

	受託先	調査研究事項	調査研究のねらい	調査研究の成果
委託研究 I	広島市		<p>【広島市立観音中学校】(学習指導に関すること)</p> <p>在籍生徒のほとんどが中国及びネパール等外国からの帰国入国者であるため、中学校教育課程の教科指導を行うには、ある程度の日本語指導が必要不可欠である。また、生活言語レベルの日本語だけでなく、教科学習に必要な学習言語としての日本語を習得させるための指導の工夫が必要である。さらに、教科指導を通じた日本語指導について、10代から70代までの幅広い年齢層や学習歴に違いのある生徒個々の状況に応じた補助教材の作成と指導方法について調査研究し、生徒の学力向上及び定着に資することをねらいとする。</p> <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語の習熟度が低く、また学習速度も遅い中高年生徒に対する効果的な学習指導 ・継続的な登校が困難なため日本語の定着度が低く、初級後半レベルの日本語学習が難しい生徒に適した学習指導 ・日本語学習を主とした学習段階から、教科学習を主とした学習段階への移行 ・教科指導を通じた日本語指導 <p>(その課題を持つこととなった背景等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年齢、母国での学習歴、来日後の生活環境、出席状況等までも異なるさまざまな生徒が、少数グループでとはいえ、一斉授業で日本語入門から学習するため、生徒間の日本語の学習速度や習熟・定着度には大きな差がある。(参考資料添付) ・未就学やそれに近い実態のため中国語の読み書きすら困難で、翻訳解説書中国語版が学習理解の補助教材とならない生徒もいる。また、母国語版の翻訳解説書はまだ発行されていない、英語を学習していないなどの理由から、母国語や、英語を日本語学習の補助媒介として使えず、日本語で日本語を学ぶしかない生徒もいる。彼らに対して、学習の速度をゆるめ、絵や実物を活用したり反復練習等を多用したりするなど工夫しているが、理解・定着が困難な生徒がいる。 ・日本語初級の前半終了時点で既に学習内容定着に差が生じる状況が見られ、既習事項の定着を前提として展開される教科学習の教材の学習内容を理解するのが困難な生徒がいる。 ・日本語教材を学習することが日本語学習であるという認識が強く、また、日本語と中学校教科書の日本語にはかなりの差があるため、日本語による教科学習に対しては学習意欲が低下する傾向が顕著である。 <p>以上のような状況の中で、より効果的で生徒の学習意欲を高めるような、教科学習をととした日本語指導について研究する必要がある</p>	<p>【広島市立観音中学校】</p> <p>(1)本年度の取組について</p> <p>上記のねらいの達成を目指して、本年度は次のような取り組みを行い、実践に結びつけた。</p> <p>①教員研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4月 第1回研修会 ・9月 第2回研修会 ・10月 第3回研修会 <p>校内で担当教員による本年度の授業に関する研修会を開催し、生徒個々の状況を把握するとともに、本年度の学習グループ編成や年間カリキュラム・使用教材・指導方針・方法について意見交換を行い、学習指導に対する意識統一を図る場とした。</p> <p>②情報収集</p> <ul style="list-style-type: none"> ・12月4日 大阪市立天満中学校 <p>先進校・大阪の天満中学校を視察し、本校以上にさまざまな状況を抱えつつ学習に取り組む生徒と彼らを指導する教員との交流や情報交換を通して、生徒状況に応じた指導方法や補助教材についての有益な情報を得ることができた。</p> <p>③授業実践</p> <p>外部講師等による多様な文化体験を通して実践的な日本語に触れさせ、学習意欲の向上に努めた。また、教科学習を通じた日本語指導について、研修や各自収集した情報を活用して、生徒実態に応じた学習教材を準備し、分かりやすい授業づくりを研究した。</p> <p><行事をととした日本語指導></p> <ul style="list-style-type: none"> ・7月 異文化交流(ディキシーランドジャズ)[観音公民館] ・10月 スポーツ交流(グランドゴルフ)[観音公民館] ・11月 校外体験学習[広島市植物公園] ・12月 音楽を通じた日本語指導(講師:森崎皓) ・1月 国際理解講座(講師:李菊枝) <p><教科学習をととした日本語指導></p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語科(昼Cグループ) ・社会科(昼Cグループ) ・社会科(夜Cグループ) ・技術科(夜グループ合同) <p>(2)改善充実の成果について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語科の授業では、日本の行事の資料を使って、漢字を練習し、ルビ無しでも内容を理解できるようになった。また、年賀状を、自分の言葉で書き教員全員に出すことができた。卒業後も引き続き漢字検定の受験を希望する生徒がいるなど漢字への関心を高めることができた。 ・社会科の授業では、母国、特に出身省の地形や世界遺産について初めて学ぶこともあり、意欲的に質問するなど、興味・関心をもって学習することができた。また、日本国内の都道府県名、都道府県庁所在地を全て漢字で書くことができるようになった。 ・くらしに役立つ社会のしくみや出来事について、話し合う学習を行った。日本での生活経験の長い生徒と浅い生徒との間での教え合う活動ができた。自分たちの国の年中行事を月ごとにまとめ日本と比べながら発表し合う活動では、異文化理解につなげることができた。 ・日本の歌を通して、自然な抑揚のある日本語を学ぶことができた。難しい歌詞など理解できなくても、その曲の雰囲気から大まかな曲の内容を理解することができた。また、「季節の曲」や「行事の曲」、「演歌」「ポップス」など様々な曲を取り入れることで日本の文化を学ぶことができた。 ・生徒がどの部分で躓いたかを把握し、その躓きを学び直す教材作りができず、学力の定着に不十分であったことは課題である。教科学習をととした日本語指導のために、①日本語の資料の読み取り、②理解、解釈、③自分の言葉で日本語を使って表現という学習過程の中で、どの場面でどのような具体的支援を行っていくのかをさらに研究していく必要がある。